

1. はじめに

筆者は、新旧の文献記録を整理して益田を襲ったとされる万寿津波について紹介した(加藤、2012)。この大津波は万葉の歌人である柿本人麻呂と密接に結びついており、それは「万寿三年五月二十三日(ユリウス暦1026年6月10日^{*})に発生した津波が、柿本人麻呂を祀った人丸寺にんがんじのあった高角山(別名鴨山)を流し去った。人々はそこから流出した人麻呂の木像が流れ着いた松崎(松佐起)の地に寺を建てて祀っていたが、津和野藩主が再度の津波襲来あるいは砂害を恐れて現在の高津の地に移転・建立(1681年)し、後に高津柿本神社と称するようになった。」というものである。「よくもこれほどの伝説が、九百年の遠い昔にもかかわらず、語り伝えられ、又文財を遺したものである。結局この災害が、未曾有のものであったからこそ、口碑としてうかがわれるのである。(矢富、1964)」とされているその伝えられ遺されたものが、文字となって残っている実態はどのようなものであるか、本稿ではそれらについて整理しできる限り忠実に紹介するとともに、それらの文献としての信頼性について検討する。



写真-1 1811年建立の松崎碑
現在立っている場所は
当時とは異なる。

2. 文献内容の抜粋・転載

別表には、文献などから万寿津波及びそれに関連する記述部分を抜き出し、作成年の古い順に示した。

津波などについて記述された文章は本来の原典から引用すべきであるが、今となつては所在不明であったり、入手不可能であったりする書物が多いため、かなわない。もとより古文書の類の読解力を持ち合わせていないため、理解は原典の現代語訳あるいは口語訳に頼らざるを得ない。幸いなことに、益田市立図書館に引用本や訳本が多数収蔵されており、本稿はそれによるところが大きい。

文章を引用する際には必ず原典名と別表引用に用いた文献名を明記した。また、別表への引用文献が原典を忠実に引用したものであるか、あるいは引用者の考えで書かれているか、引用者が原典の記述をどのように評価しているかなどが判明するときは、それをも併記した。津波の記述に関係ないと筆者が判断した部分については省略した。

列挙した文献の中には、他者によって偽書と判断されたもの、成立年に疑義があるものも含まれている。しかし、原典の記述についてはそのまま引用し、対する考えを併記した。

^{*} 加藤(2012)では万寿津波の発生年月日を「西暦1026年6月16日」とした。これはグレゴリオ暦への換暦であり、本稿からは歴史地震研究会の標準形式(松浦ほか)に従って、ユリウス暦に発生日を改める。

3. 万寿津波を記載した諸文献の信頼性

都司ほか(2010)は、津波浸水高さの標高測定値の総合的なデータベースを作成する過程における原文献の信頼度判定の基準として、表-1の分類を示している。

表-1 原文献信頼度の判定基準

判定区分	判定基準
A	津波の直接体験者、または被災地方の公的な立場の人が被災直後に記した文献
B	B-1 体験者が、年月を経て記した文献
	B-2 近世の信頼の置ける編纂者が編集した文献に記載したもの
	B-3 「石段何段目」など、地点の明白な口頭伝承
C	C-1 近現代の編纂物にのみ現れる記載
	C-2 現在に依存した伝承
D	D-1 風聞によるもの
	D-2 現代人の憶測によるもの
X	積極的な理由があつて、その数値の採用を拒否すべきもの

この基準では、「A」は体験に基づいておりまず間違いはないもの、直接体験の「B」も信頼性は相当に高い。それらに比べ、「C」は書き記した人の主観でどうにでも表現でき、「D」ともなると噂の領域であり、信頼性には極めて乏しい場合がある。「C」と「D」に判定される文献を採用するに当たっては、内容の相当な吟味あるいは検証が必要であろう。

以下では、万寿津波が記述された文献の信頼性について、事例を挙げてこの基準に照らし合わせて考えてみる。

(1) 室町時代中頃の1448-1450年頃に書かれた「正徹物語」が、万寿津波に類する事件について記した最初の書物といわれている(矢富、1964)。著者は1236年に創建された京都東福寺の書記であった正徹(1381-1459)である。

「正徹物語」では「大雨が降ったときに当たり一面海となって人麻呂像が流された。水が引いた後に木像が掘り出された所で祀ることを始めた。」と書かれているが、書かれたのは万寿津波が起きてから約四百数十年後のことである。これを伝承に基づいているとすれば「C-1」、若しくは著者の立場を考えると「B-2」に判定できるかも知れない。しかし、都にいて地方からの昔の伝聞を書き記しただけとすれば「D-1」となる。この物語からは「人麻呂像が流された」原因は洪水とも高潮・津波とも断定しがたい。

(2) 「正徹物語」以外の書物や品々の多くは江戸時代に入ってからのものであるが、中には昭和になってからのものもある。

神(2010)によれば、「日本行脚紀行」が鴨島水没を伝える最古の文献であり、1686年に書かれたとされている。ここに書かれた内容は、作者が旅行中に高津に立ち寄った折りに知り得た情報を元にしてであろうことは容易に想像がつく。万寿津波から既に660年が経ち、現柿本神社の社殿が藩主のお声掛かりで「人麻呂の木像が流れ着いた」松崎の地から今の高津に移築されて既に80年近く経っている。移築された「人丸御社」の伝承を記したものとすると「C-1」であるが、具体的な地点名が挙げられていることから「B-3」ともいえそうである。但し、益田道路発掘調査事務所の発掘調査はこの松崎の地(浜遺跡)から遺構・遺物等は検出されなかったとしており、「B-3」の口頭伝承には疑問符が付く。

この書き物で不思議なことは、津波発生年に全く触れていないことである。都司ほか(1995)は、『「万寿3年5月23日」と発生日まで期した文献は、「沢江家文書」のほか「八重葎」などにもかかかれている。従って江戸時代まで各所に伝わった口頭伝承のなかにこの日付も正確に伝えられた物とみられる。(原文のまま)』と考えているが、ならば藩主や由緒ある社寺関係者がこれを知らぬはずはないであろうし、知っていれば当然作者である俳諧師大淀三千風(1639～1707)は書き残したであろう。「日本行脚紀行」に「いつ起きた津波」と書かれていないということは、彼ら「信頼の置ける」者達も当時は知り得なかったことと思われる。従って、万寿三年に起きたと伝わった口頭伝承の信頼性は乏しいものと考えなければならぬであろう。

享保年間(1716-1736年)に書かれたという「沢江家文書」以降、ほとんどの書き物が「万寿三年に津波発生—松崎への像の漂着—高津に移築」という流れを踏襲する。

(3)「石見八重葎」には万寿津波による各地の被害が列挙されている。島根・山口県境の岬が崩れ沈んだ、現益田市横田町あたりでお寺が流された、現益田市中須町沖合いの鴨山が崩れ流されたなど、現在の益田市から浜田市、江津市、川本町、大田市仁摩町に至る各所の様子を紹介している。著者である石田春律(1757-1826)は現在の江津市松川町に生まれた名主であり農学者ともいわれる。書かれた内容は「B-2」に判定されそうであるが、被災地・被災状況を知り得た根拠にはまったく触れておらず、それまでの「伝承」に基づいていることから「C」又は「D」判定の領域を出ることはない。

(4)江戸時代の文献の多くが万寿津波を肯定的にとらえている中で、否定的な意見も見受けられる。「筆柿記」や「石見国名跡考」などが挙げられ、なかでも幕末から明治期の国学者藤井宗雄による「石見国名跡考」は、「鴨山といふがなきゆゑ、万寿の海溢に託して遁辞し、」とまで書いている。

(5)近現代になると、益田の郷土史家である矢富熊一郎は自らの著作の中で、万寿津波に関する文献やそれに取り上げられている被災箇所を数多く紹介するとともに、断層地震説を唱えるなど積極的に自らの考えを提示している。別表を見て分かるように、引用の多くは矢富の著作からである。矢富の残した文献類は過去の再録と解説もいべきものであるため「C-2」に判定されよう。

一方で、矢富(1941)は「沢江家文書」を引用説明する中で標高約60mの地点まで津波が押し寄せたと意識的に書き、矢富(1964)では「沢江家文書」から「想像すると」として、津波が益田川上流の久々茂一帯(標高30～35m)を浸食したとしている。これらは明らかに「D-2」に判定される。

(6)飯田(1979)は万寿津波を学術的な観点から検討し、地震の規模、震央位置などを求めた。但し、検討の根拠となった被害地や被害程度は、「今から約950年前も昔であるが、大災害であったため永続して伝えられていたものと考えられる。」として、上記した近世～現代の文献に求めている。羽鳥(1994)は飯田の成果を紹介しつつ、まだ不明な点が多く調査すべき課題があるとしている。ロシア・ノボシビルスク・津波研究所のWebサイト(Historical Tsunami Database for the World Ocean)は、飯田の検討結果を引用して Area Name が「TAKATSU & MASUDA」の津波として掲載している※。

※ 島根県技術士会防災部会津波研究会岩田昭夫氏より御教示いただいた。ここにお礼申し上げます。

4. おわりに

万寿津波について書かれた昭和・平成の時代の文献はいずれも、江戸時代の記録を「災害が未曾有のものであったからこそ口碑として600年以上も残った」という観点に立って記録されたものとして評価する。一方で神(2010)は、江戸時代の記録には『時代が下がるにつれて潤色・改変が進んだことを確認できる。したがって、このような「創られた伝説」を史実とすることは出来ない。』と指摘している。

江戸時代の多くの文献は近世になって初めて現れたものであり、あるいは風聞・憶測から記述されている。その信頼度は「C」又は「D」と判定され、信頼性があるとはいいがたい。中には「B-2」あるいは「B-3」に判定されそうな文献が僅かに見られるが、確定的ではなく疑問符がつく。一方、津波を否定する、あるいは柿本人麻呂には着目しても津波のことには全く触れていない文献も存在する。筆者は自然科学に携わる者として、「万寿」の津波について記した文献類の信ぴょう性は非常に薄いとわざるを得ないのではないかと考えている。

引用文献

- ・飯田汲事(1979)：歴史地震の研究(2) 万寿3年5月23日(1026年6月16日)の地震及び津波の被害について、愛知工業大学研究報告B、Vol.1973-03、通号 14、203.
- ・石見地方未刊資料刊行会編(1999)：角部経石見八重葎、石見地方未刊資料刊行会、(株)報光社、220, 227, 288, 292-294.
- ・web KADOKAWA 正徹著・小川剛生訳注：正徹物語 現代語訳付き、角川学芸出版、2011年、 <http://www.kadokawa.co.jp/tachiyomi/bunko/index.php?pcd=200906000429>
- ・大庭美一(1975)：横田物語、11-12.
- ・加藤芳郎(2012)：益田を襲った万寿3年の大津波、島根県技術士会平成23年度研究報告、11-18.
- ・神 英雄(2010)：柿本人麻呂の石見、自照社出版、164, 165, 159-161, 167, 182.
- ・須佐町誌編纂委員会(1993)：須佐町誌、須佐町、858-859.
- ・都司嘉宣・加藤健二・日野貴之(1995)：万寿地震津波を伝える文書・伝承とその書誌学的考察、鴨島学術調査最終報告書-柿本人麻呂伝承と万寿地震津波-、鴨島伝承総合学術調査団、24, 27, 35, 38.
- ・都司嘉宣・松岡裕也・今村文彦(2010)：歴史津波浸水標高データの史料からみた再検証、歴史地震、第25号、115.
- ・Tsunami Laboratory, Novosibirsk, Russia : Web Encyclopedia on Natural Hazards, <http://tsun.ssc.ru/nh/tsunami.php>
- ・羽鳥徳太郎(1994)：山陰地方の津波の特性、津波工学研究報告、第11号、37.
- ・益田道路発掘調査事務所：浜遺跡 <http://www.cgr.mlit.go.jp/hamada/maibun/hama.htm>
- ・松浦律子・佐竹健治：「歴史地震」の標準形式 <http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/rzisin/doc/A4format2nd.pdf>
- ・矢富巖夫(1975)：益田の石碑文、石見詩人社、14, 79.
- ・矢富巖夫(2011)：二つの石見国柿本社、平成23年度石陽講座Ⅲ第8回資料、益田市立雪舟の郷記念館、11-12, 13-14.
- ・矢富熊一郎(1941)：安田村発展史(上巻)、安田村図書館、155-156, 159, 218-219, 648-649.
- ・矢富熊一郎(1964)：柿本人麻呂と鴨山、益田郷土史矢富会、107, 112-113, 114, 115, 116, 220, 222, 225.

別表 文献などにみる万寿津波及び関連する記述

出典 上段：原典名・作成年、 著者 下段：引用文献	記述内容 (抜粋、下線・西暦年は追記)
正徹物語・1448～1450年頃、東福寺・右筆正徹 web KADOKAWA 正徹著・小川剛生訳注による	<p>人丸の木像は石見国と大和国にあり。石見の高津といふ所なり。この所は西の方には入海ありて、うしろには高津の山がめぐれる所に、はたけなかに宝形造の堂に安置したり。片手には筆を取り、片手には紙をもち給へり。木像にておはすなり。一年大雨の降りし頃は、そのあたりも水出でて、海のうしほもみちて海になりて、この堂もうしほか波かにひかれて、いつちともゆきかたしらずうせ侍りき。さて水引きたりし後、地下の者その跡に島をつくらんとて、鋤鋤などにて掘りたれば、なにやらんあたるやうに聞えしほどに、掘り出だしてみれば、この人丸なり。筆もおとさず持ちて、藻屑の中にましましたり。ただごとにあらずとて、やがて彩色奉りて、もとのやうに堂を立てて安置し奉りけり。この事伝はりて二三ヶ国の者ども、みなみなこれへ参りたりけるよし、人の語りしを承り侍りし。</p> <p>この高津は人麿の住み給ひし所なり。万葉に、 石見野や高津の山の木の間より我ふる袖をいも見つらんか といふ歌は、ここにて詠み給ひしなり。ここにて死去ありけるなり。自逝の歌も上句は同じ物なり。</p> <p>石見野や高津の山の木の間よりこの世の月を見はてつるかな とあるなり。人丸には子細ある事なり。和歌の絶えんとする時、必ず人間に再来して、この道を続き給ふべきなり。神とあらはれしことも度々の事なり。</p>
柿本神社が蔵する釣燈籠 ・1608年 矢富巖夫(2011)による	<p>大久保石見守長安奉納とされる釣燈籠(金燈籠) 「慶長拾三年¹⁶⁰⁸戊申正月吉日大久保石見守」の銘あり。 [以下は、柿本大明神同社務真福寺由緒書(享保十六年¹⁷³¹)の記述] この時代は公領にて、大久保石見守長安朝臣銀山に在りて、この境をも御支配あり。地頭、御建立の先例に任せ、慶長十三年に当たりて、当社の御造営是あり。棟札に直に、当国太守大久保石見守長安朝臣と記し、脇書には代官竹村丹後守、同岡田六右衛門尉、譜代奉行は、深田次郎右衛門と記せり。即、献上せる処の、<u>金燈籠、今に宝庫に存せり</u>。 (筆者注：本由緒書については、後述する「柿本大明神同社務真福寺由緒書(享保十六年)(1731)」の項を参照のこと。)</p>
日本行脚紀行・1686年、大淀三千風 神 英雄(2010)による	<p>此人丸御社むかしは此沖一里に鴨嶋とて。高津の浜のみこしに有りしが。いつのとしかか。<u>津波のために島を颯込て。あなやといふ所に。木像は二本の松々枝に御して。高津の浦により給ふとなん。</u></p>
高山狗留孫伝縁起並高山の縁由(口訳)・1705年 須佐町誌編纂委員会(1993)による	<p>元禄16年¹⁷⁰³龍集 前総持紹孝現住門超叟宗岩謹誌 十里ばかり彼方に石見の高角山があつて、すぐ真下のように見える。この山には人丸の墓があつて柿本と呼ばれる。柿本人麿はその生死は確かではなく、<u>権化の人(神が人に姿をかえた)との言い伝えがある</u>。位階は従三位で奈良の都の頃、持統と文武の両朝に仕えた。和歌の神として人間第一の誉を得た人である。人丸は老いてこの地に来て(石見)、高角松の一詠を残した。今も人々から信仰され尊ばれている。</p>
沢江家文書・享保年間1716-1736年、(1772写本) 矢富熊一郎(1941)による 矢富熊一郎(1941)による解釈	<p>萬壽三年¹⁰²⁶丙寅五月二十三日亥ノ下刻、大海嘯掩_レ襲_レ田疇_ヲ。民帑悉ク流埋_シ、山野摧裂_シ、亦不_レ留_メ。昔日之蹤跡_ヲ。殘存_ノ民庶瀕ス_ニ塗炭_ニ。利兵衛・吉兵衛等、 高波の餘波は南進して、遠田郷を浚ひ、前濱と中遠田との田野を洗つて貝崎に迫り、更に南進して上遠田の低地を這ひ、黒石の崎角堰堤の堤防まで迫つて來た。ために、低地に居る住民の資財は、悉く流失或は埋没して、山野耕作地の被害は、目も當てられぬ程の惨状を呈し、昔日の俵は全く消失して、此の世ながらの阿鼻叫喚を露呈した。夜の中の事とて、波に浚はれて行衛不明となつたものも相當の數に上つた。殘存した住民とても、家財を失つて生活の途を杜絶され、塗炭の苦に瀕した。此時上遠田では、坂上家の宗家たる、利兵衛及び其子喜兵衛、芝家の右兵衛等は、</p>
都司嘉宣ほか(1995)による評価	<p>この文書が、平安時代に書き起こされた文が江戸時代まで書写された物などではなく、せいぜい江戸初期の文献であることは残念ながら認めざるをえないのである。(中略)われわれはこの「沢江家文書」を、享保年間に文字化されたのであろう。したがって、沢江家文書の万寿津波の記事は、正しく古代からの文章が伝わったものではないことは明白である</p>

	が、逆にまったくの「つくり話」、つまり架空の話でもあるまい。(中略)遠田に津波の口頭伝承が伝わっていたことを示す客観的な史料である、と評価するのが妥当であろう。
柿本大明神同社務真福寺 由緒書(享保十六年)・ 1731年 矢富巖夫(2011)による	維時享保十六年亥五月 高角山社頭支配職 勅権律師 妙巖謹誌 当社御建立の発端は、聖武皇帝の御宇 ⁷²⁴⁻⁷⁴⁹ 、神亀年中勅命に依って、時の国守造立の由、傳へたり。その頃の社寺は往古の鴨島にして、往古は当所、今の磯地より沖へ遙かに指し出たる地続きの島山あり。是を高角山と号す。この山、一山三名の山にして、万葉集には鴨山といひ、拾遺集には妹山と称す。人丸御在世の時、この山に在して自ら木像の御影を遺し、神亀元年 ⁷²⁴ に入滅し給ひしより、即ちこの山に御廟の社を建て、右御自作の御影を納めて鎮護国家の神に崇め給ふ。この山にて御入滅のことは、(中略)寺号を人丸寺と称し、山号も直に高角山と号し、御廟を修め忌日を祭り来りしなり。その砌は人家も三千軒あり。宮寺の繁昌もこのときを盛んなりとし、今に至りて高角浦の三千軒といひ伝ふるは、このときの事なり。又高角は西向きの名所と称するもこの時代の方角なりとぞ。然るに、御入滅より三百年連続と相継ぎし来るところに、後一条院の御宇万寿三年五月、当浦に高浪沸き上がり、この山も崩れて跡を海中に没し、宮寺並びに三十の人家共に滅没し、面の波濤となり失せぬ。是に於いて、神亀以来の神跡遺証悉く海中に没し、退転し給ひぬ。(中略)然して、この滅後の刻みの時の大守再び宮寺を建立せんことを欲し、右、御自作の御影を海中に尋ね給ふといへども、所在を得ずして、既に方便に絶へ給ふの所、昔より御廟の前に在りし二岐の松の大木、尊像をその枝に載せて、与佐羅の乙女の竜宮灯の金灯と籠と共に、磯辺に寄せ来りしに由りて、即時に宮寺を御再興有りて、即ち、此処を松佐起と名付け給ふ。尊像の海中より揚がり給ひて、宮寺御再建あるも、人力にはあらず。松を佐け起こせしと云ふの義による。今の世に至って、このときの社地を松佐起と称へ来れり。(中略)万寿御再興の社地は、今当所の町尻より三丁程を隔て、北に当たりてその地有り。社寺の構へは両脇後方の三方は池、池の外は土手、土手の外は松原にて、此の内に社と当寺とを並べ造りてあり来りしなり。
神 英雄(2010)による由緒の評価	同書(筆者注:『柿本社並真福寺由緒明細記』のこと。上段で引用した由緒書とは異なるものであるが、書かれた内容は両書ともほぼ一致する。)は、享保十三(1728)年に同社の僧快信の遺言により筆記されたが、その後、虫食いにより意味不明な箇所もあり、津和野藩主亀井茲監の命により、慶応三(1867)年十一月に宝応が再編集して一冊にしたものとされる。(中略)推測すると、享保年間に快信が藩主に縁起を献上した際に、当時存在した複数の文献を元に創作した箇所がかなりあるものと見られる。また、同縁起は幕末に宝応が再編集したとされるが、快信が残した原縁起の内容をどれほど正確に伝えるものであるかは不明である。現存する縁起は、快信の著した原縁起の内容をもとに、多くの文献を参考にしながら宝応が加筆したものと考えられる。
翁小助問答記・1737年 矢富熊一郎(1941)による	老人宜はく『其昔高角鴨島遠田の柏島と云ひし名島あり、知れりや。』小助答へて、『鴨島の儀は語り傳へて承る所なり。柏島の儀は未だ知らず。』老人宜はく『鴨島には其昔文武天皇御宇 ⁶⁹⁷⁻⁷⁰⁷ 、彼島に人麿居住座す所に、一歳四海波の為に打ち壊される。然れども、人麿凡人ならざるに依りて、高津の松崎へ上り給ふ。さすがの聖神、時の天災逃れ難し。(中略)さるに依りて、人麿もよりもより此島にも御座ありけり。』(中略)尚此島とおなじ時にくづされにけり。惜しむべし。二箇所の名島一時に断絶せしこそ、不思議なりけれ。世人鴨島をば聞き傳へ、其蹟今に存せるが如し。其頃高津には數千の人家有るに依り、語り傳へる所なり。遠田の儀は、其頃人家貳参軒あり。人數も無き故、柏島の儀は語り傳へずなん。(世人)知らざるもことわりなり(る)。
都司嘉宣ほか(1995)による評価	万寿津波の伝説が、1737年という江戸時代も早い時期に記録化されていることに注目したい。
筆柿記・1742年、 金丸常昭 矢富熊一郎(1964)による	余おもふに、御廟彼の島(鴨島)にありけること信用し難し。これは所にいひ伝へたる事にて縁起にあり。其辞のままここにしるしぬ。
遠田八幡宮由緒・1761年、大島八鹽 矢富熊一郎(1941)による	于時寶曆十一辛巳 ¹⁷⁶¹ 三月吉祥日 大島八鹽源定常代改レ之記録畢 臨ミニ海岸ニ有リニ於山ニ森々タリ。瀧岩乎高角ノ鴨島洪波暴浪ノ砌成スニ空虚タル白砂ヲニ。 但し、矢富(1964)では次のような訓読文となっている。 臨ムニ海岸ニ有リニ杉山ニタル森々タル龍岩ニ乎。高角鴨島ノ洪波暴浪ノ砌、成ルニ空虚ノト白砂トニ。

<p>正一位柿本大明神祠碑 ・1772年、大典禪師顯常 矢富巖夫(1975)による</p>	<p>[明和九年¹⁷⁷²、津和野藩主亀井矩貞が建立した亀趺碑] 神亀元年甲子三月十八日高角山に卒す。終に臨み歌あり。山間の月を嘆じ濫焉として別をなすと云ふ。国人為に廟を厥地に立て人丸寺を置いて掌祀す。其の山海上に横出す民邑の頗る庶し。万寿三年丙寅五月海騰り山崩れ峯つて皆湮没す(原文：萬壽三年丙寅五月海騰山崩峯皆湮没)。既にして一松汎んで波に遊ぶ。神像其極に存す。因りて更に廟と寺を作る。相承ぐこと六百有余載、其の地を松崎と曰ふ。津和野の藩となるに及びて皆焉に属す。尚その浜海口(うかんむりに火)ひ有らんことを恐るるや、命じて之を南に遷すこと一里にして遠し、仍つて高角山と名づく古に存するなり。享保八年¹⁷²³癸卯公歿するの一千載に属し詔して</p>
<p>石見名所集(石見名所方角図解)・1774年、香川景隆・江村景憲 矢富熊一郎(1964)による 神 英雄(2010)による</p>	<p>鴨山は高津浦の沖にあり。今は鴨島と云ふ。鴨山伝説鍋嶋の跡は、今なるは三瀬といふ。鴨島の東にあり。かもしま地をはなる事十五歩許、たて廿歩許り。あさき所は或は四尋、ふかき所は十二三許りたつとぞ。海上壹歩、七十尋にて、間にして五十四間程也。むかしの鴨島の形は波にしづみ、底の岩瀬のみ也といへども、其名は千歳の今にくちずして、諸人能しる所なり。新清(名、元麻呂)は神道の達人、一流を立てし程の人成るに、いかなれば此集を撰ぶに至りては、高角山・石川・鴨山等の、慥なる、所を誤りたるぞや。誠に所ひいきやらの、俗意を離れ記す。一条院の万寿三年丙寅年大波起て、都て此辺の浦山おびたゞ敷崩れける。鴨島、鍋島等も。悉く崩れ、木像も失せさせ給ひたるが(下略)</p>
<p>松崎碑・1811年 矢富巖夫(1975)による</p>	<p>[文化八年¹⁸¹¹藤原持豊の撰のある石碑を建立(写真-1)] 石見の国高津の沖に鴨島となんいひて大なる島山あり神亀元年甲子三月十八日柿本のおほん神かんざりませし所にして御辞世のやまと歌萬葉集拾遺集にのせられたり此所に御廟尊像は自らつくらせ給うとなん寺をば人丸寺と名づく都より北海に渡海の船此の所によせ来り賑わしくさかとなりし地なりしに御一条院の御宇萬寿三年丙寅の五月高波のため彼の島をゆりこぼたれ宮寺を初め民屋残りなく海中に没しぬしかありしに彼鴨島のおほん社の前に二枝にわかれたる松あり此松の枝尊像を帯て高角浜により来りぬ此処を松佐起社と名づく人々信感に堪えず其処に社と寺を造り尊像をもすへ奉りしに延宝九年¹⁶⁸¹に今の高角山に社地をうつし奉りしまで年凡そ六百有余年松崎にて祭事をいとなみ奉る</p>
<p>角部経石見八重葎・1817年、石田春律 石見地方未刊資料刊行会編(1999)による</p>	<p>[美濃郡上之巻] ・戸田郷之内 持石村 昔此所に長六尺位横三尺位の厚サ式尺位の世に麗神石アリ。諸人持林故万人持石といふ。此故に持石村と云。万寿三年の大高浪三行方不知候所文化末¹⁸¹⁸の頃、ふたごひ(たび)又此村江一夜の内に上ルよしいふ。 ・横田郷之内 寺垣内村 昔此所に護寶寺人云大寺アリ。(中略)此寺高角村長者の菩提寺なり。(中略)万壽三年之大高浪に崩れ、今ハなし。故に寺垣内村といふよし。(護寶寺は)敏達天皇十四年⁵⁸⁵二月、曾我大臣馬子宿弥ニ仰テ、塔ヲ大野岡ノ北ニ御立アリ。是仏堂の初メナリ。此事日本記(紀)ニ見ヘタリ。 [井六ヶ所名所] ・美濃郡高角浦の沖、今水嶋の辺、今ハなし 鴨山 津和野御評 高津の沖に有、人皇六拾一代、後一條院万寿三年L丙寅、大津浪によつて崩れ、今ハなし。 石田春律愚評 (前略) 去共此嶋并ニ水嶋ともに、人皇六十八代後一條御宇、万壽三丙寅年五月廿三日乃、大高浪に崩れ、御社を始、人丸寺、民家ともに皆浪轉いたし、漸く御神躰斗り、此嶋のニ夕侯の松にのらせ給ひて、今、松崎といふ所へよらせたまひ、故に此處を松崎といふ。人丸公卒去、神亀元甲子724より、万壽三丙寅乃年まで、三百三年におよぶ。夫口延寶八庚申¹⁶⁸⁰迄、又六百五十四年ニ成ル。右松崎に、天和元辛¹⁶⁸¹酉ノ年口、鍋嶋山近邊今の高角山へ、宇多天皇乃末葉、當國津和野三本松の御城主亀井因幡守源茲満公、又の高浪を恐れ給ひて、只今の高角の山へ奉迂(遷)給ひてより、天和元より文化十二年¹⁸¹⁵迄、百三十五歳におよぶ。神亀元子ヨリ文化十二乙亥迄千九拾一年ニ成ル。 ・美濃郡古名石見浦今飯野浦 石見瀉 新清廣貞評 迹广郡礪竹村に有、今崩れ瀉といふ。 石田春律愚評</p>

	<p>一説、礪竹村といふとも、右景物四所之内、千鳥玉藻ハ東シ、礪竹浦西今、飯野浦にもせよ、何れも海邊なれハ両村ともに叶へり。高角山、比口(ネに豊)振山、此両所東ニなし。然ハ此處ならん。長門国境乃大山ニ加年山に續く岩奈仁山、岩崎山、此両所有。故に此村古名石見村、岩奈仁村、石見乃浦今、飯野浦といふ。長州境に續く海邊乃村也。(中略) 爰を以古名、石見の浦猶又、<u>此所も万寿三年の津浪に、東へ出張し所大に崩れ、今ハ瀉なしといふ共、委細先乃図を見しり給へ。此瀉古しへ万寿三年迄ハ有し故に、石見瀉と云伝ふ證口(てへんに處)ハ、今も底瀉是有なり。</u></p> <p>(絵図) [石見瀉・サンショウシマ・ジンノハナ・岩サキ山・岩向山・飯ノ浦・万寿三年ツナミニ、コレヨリサキ今ハカケテナシ]</p>
<p>柿本人麻呂事蹟考弁・1823年、岡 熊臣 ----- 矢富熊一郎(1964)による</p>	<p>熊臣今古等の諸説を合せて、尚熟考するに、上に或人も云へる如く、今の高角の地、古代は宜しき船着にて、<u>港口に鴨島とて一つの島ありて、其処に家居数百軒あり。其山を鴨山と云ふ。梵刹などもありて、中にも前浜・後浜と云ふに、十福・万福とて大寺あり。</u>(彼の万福寺は万寿大變の後、益田郷に移建て今に存し、千福寺は遂に廢して、今空しく古高角の海辺に、千福寺渡といふ、川の名にのみ残れり。是即その跡なりといえり。) 其外青楼花街軒を並べて、最繁華の地にて、北洋往還の泊船、日夜つどひて大なる港なりしが、後一条帝の御宇、<u>万寿三年丙寅五月、津瀆の為にゆり崩されて、鴨山なくなりしかば、船入の便も悪しくなりて、遂に今の如き地とはなれりしなるべし。</u>今現に古高角浦の川底、海岸の砂中などに、礎石或は石塔五輪などの、多く埋れてあるが、皆古代のものなるにて知るべし。(中略) 此故に今予が此書には、旧説に従ひて、人麻呂の没所鴨山の地は、今の高角と定めて、大概を弁ふるものなり。</p>
<p>石見国名跡考・1869年、藤井宗雄 ----- 矢富熊一郎(1964)による</p>	<p>鴨山といふがなきゆゑ、<u>万寿の海溢に託して遁辭し、遂に旧染を洗うこと、能はざるはいかぞや云々。</u>此高津を柿本朝臣の古跡と云ふを按るに、高角と唱の似たるより、彼の歌と誤りて、小祠などを建たりけむが、遂に名高くなりて、名所とはなれるならむ。</p>
<p>石見海底迺伊久利・1872年、金子杜駿 ----- 矢富熊一郎(1964)による</p>	<p>鍋島のあとは、今鳴神瀬と云ふ。鴨島の東にあたりて、鴨島の地を離ること十五歩ばかり、横三歩、堅二十歩ばかり(海上の一步は七十尋也。間にして五十四間に中る也。) <u>昔の鍋島は波瀾にしづて、底の岩瀬となりぬれど、其名は千歳の今に朽ちずして、諸人の知る所なり。</u></p>
<p>大庭美一(1975)</p>	<p>万寿三年の大海嘯 人皇第六十八代後一条天皇の万寿三年五月二十三日亥ノ下刻、この地方は空前の大高波の襲来をうけ、高津千町が原や高津沖にあつた鴨島等が流亡し、高津長者の菩提寺であつた寺垣内(神田)に建つていた大寺護宝寺が崩れた事が石見八重葎にも記されておりますが、横田の地にどのような被害を生じたものか、これを明らかにする記録も見つかつていませんが、(中略)横田の市原地内で市立養老院と牛尾鶴男氏宅との間の断層がと切れて市原部落の中央地点の近くまで溢になつており、この箇所を舟ヶ溢と呼んでいますが、この地名の起源は万寿三年の大海嘯の際に舟が打ち上げられたので、それが地名となつたと言はれていますが、これにはもう一つ異説があり、横田平野は大昔は海であつたもので、舟が溢は深い入江になつていて里人が舟をつないだ所であつたので、それが地名となつたものとも云はれております。二説を比較して見ますと双方とも成程と思はれる所がありますが、どうも海嘯説の方が真実性が強いように思はれます。</p>
<p>都司嘉宣ほか(1995)による評価</p>	<p>昭和52年大庭美一によって著された「横田物語」に、<u>新しく津波到達点にかんする史料が紹介された。</u></p>
<p>飯田汲事(1979)</p>	<p>万寿3年5月23日(1026年6月16日)の地震および津波の災害について、資料調査と現地調査を行い収集した資料を解析した。<u>この地震により島根県益田市高津の沖合にあつた鴨島・鍋島・柏島の陥没および石見の海岸地域の隆起・沈降などの変化が起こり、高津川・益田川下流域および江川下流域に大津波が来襲して大被害を与えた。</u>地震の規模Mは7.6、津波の規模mは3程度と推定された。また震央は131.8° E、34.8° Nと推定される。</p>
<p>羽鳥徳太郎(1994)</p>	<p>1026年益田沖地震に伴つたとみなされる大津波の伝承がある。高津川河口付近では、6~10mの波高に達したと推定されているが、また不明な点が多く、防災上の観点からもさらに調査すべき課題であろう。</p>